

「カレーのある家」

— 2 稿 —

2025/9/30

雨森 れに

〈人物表〉

仁科 利尋 にしな としひろ

(35)

独身。週末里親をしている

早瀬 忍 はやせしのぶ

(9)

養護施設・なごやか園の児童

林田 ゆかり はやしだ

(66)

養護施設・なごやか園の施設長

1. なごやか園・外観（昼）

門に「児童養護施設 なごやか園」と掲げてある。

2. なごやか園・応接室（昼）

テーブルとイスだけの簡素な部屋。

テーブルの上には「週末里親制度」の書類。

仁科利尋（35）がサインする。

それを見ている林田ゆかり（66）、おだやかな表情をしている。

林田 「それでは、今日はトライアルということで。明日のお昼までお任せしますね」

利尋 「はい。今夜は一緒にカレーでも作ろうかなって」

林田 「いいんじゃない。それに、懐かしいでしょ」

利尋、照れたように笑う。

利尋 「そうなんですよ。俺もいろいろ思い出したら最初はカレーだったなって」

林田、笑顔で頷く。

3. なごやか園・忍の部屋（昼）

6人部屋。2段ベッドが並んでいる。

そのうちのひとつ、下段にリュックをかかえた早瀬

忍（9）がいる。

同室の男子児童が話しかける。

男子 「明日には帰ってくるんだっけ」

忍 「昼までだって。知らない人んちなんて嫌なんだけど」

男子 「でも、オレらの先輩なんですよ。面接の時どうだった？」

忍、少し考えて、

忍 「ぎぜんしゃ？」

男子 「それってどういう意味？」

ドアがノックされ、林田が入ってくる。

林田 「用意できてる？ 仁科さんのおうちに行くよ」

忍、林田の後ろに利尋がいることに気づく。

利尋 「こんにちは。今日はよろしくね」

忍、視線を逸らし、頷く。

4. 養護施設の送迎車・車内（昼）

ライトバン。林田が運転しており、後部座席に利尋と忍が並んで座っている。

利尋、忍の様子を伺う。

忍、つまらなそうに外を見ている。

5. 仁科家・玄関・外（昼）

マンションの一室。

林田が頭を下げ、去っていく。

6. 仁科家・玄関・内（昼）

利尋が扉を閉める。

後ろにいる忍に向き直り、しゃがんで視線を合わせる。

利尋 「男ふたり、気楽に過ごそうな」

忍 「知らない家で気楽とか無理でしょ」

利尋、焦って、

利尋 「だよね。でも、忍くんが楽しく過ごせるように頑張るよ」

忍 「お菓子、食べたい」

利尋 「じゃあ買い行こうか。忍くんの好きなもの教えてよ」

7. スーパー・店内（昼）

まばらに客がいる状態。

利尋 「待って！」

利尋、カートを押しながら走っている。

その先で忍が走っている。

利尋が忍の首根っこを捕まえる。

利尋 「他の人の迷惑になるでしょ！」

忍 「他人を引き合いに出すのはよくない子育てらしいよ」

利尋、あつけにとられる。

忍 「放してよ」

利尋が手を緩めると、忍は青果売り場へ。

利尋が後を追う。

忍、ばら売りの玉ねぎをかき回す。

利尋 「ちよっと！」

利尋、止める。玉ねぎをひとつカゴへ入れる。

忍、玉ねぎの隣にあるじゃが芋もかき回す。

利尋 「ダメだつて！」

利尋、止める。じゃが芋をカゴへ入れる。

その隣にある人参もカゴに入れる。

忍、さつま芋をピラミッド状に積み上げている。

利尋 「おいしい！」

利尋、止める。さつま芋がひとつ、床に落ちる。

拾ってカゴに入れる。

忍 「だから、なんでダメが理由言わないとさあ」

利尋、少し考えて、

利尋 「まだ購入してないものを——」

忍 「難しくてわかんないね」

忍、走り出す。

利尋、追いかける。

ふたりはお菓子売り場で攻防になる。

忍はすばしっこく逃げつつ、棚のお菓子をカゴに投

げ入れる。

利尋、何度も掻い潜られながら、なんとか捕まえる。

忍 「放せっつて！」

利尋、暴れる忍の手をしっかりと握る。

利尋 「はいはい。あとでお説教だからな」

利尋は忍をひきずりながら歩き出す。

ふたりは注目を浴びながら精肉売り場へ。

利尋、豚ロース肉を手取る。

忍 「豚肉やだ」

利尋 「カレーは豚肉だろ」

忍 「俺、カレー嫌い」

利尋、驚いたように忍を見る。

利尋 「カレー嫌いな子供なんている？」

忍、何度も頷く。

利尋 「園以外のカレーは？」

忍 「食べたことない」

利尋 「じゃあ、物は試して」

豚ロース肉をカゴに入れる。

忍 「あー！ もう！ 嫌だって言ってるのに！ もう帰る！」

利尋は無視する。

忍に蹴られ、大きいため息をつく。

8. 仁科家・リビング(夕)

10 畳ほどのLDK。ダイニングテーブルで利尋と

忍が向かい合って座っており、テーブルの上にはス

ーパーの袋が置いてある。

利尋 「まず。スーパーで走らないのは忍くんが怪我しないため

ってのもあるけど、周りのお客さんを守るためです」

忍 「は？」

利尋 「妊婦さんとかお年寄りもいたでしょ。何かあったらどう

するの？」

忍、ふてくされて無言。

利尋 「次に、商品を乱暴に扱ってはいけない。これは買うまで

お店の物ってこと。けど、次の人も安心して買物でき

るようにつて意味もある」

忍、無言。

利尋 「ルールの裏にはね、他人への思いやりがあるんだよ」

忍 「でもさ、そういう考え方って偽善者じゃん」

利尋 「人に優しくして何が悪いの」

忍、また無言になる。

利尋 「ルールが守れない子は受け入れられないよ」

忍、口を引き結ぶ。

利尋、軽く息を吐きだす。

利尋 「今日はたまたまだよな。ほら、お菓子食べな」

利尋、袋からお菓子を出して並べる。

忍、お菓子をちらりと見て、

忍 「別にそれ食べたくない。入れただけ」

利尋、一瞬驚くが笑いだす。

利尋 「お前、ほんとクソガキだなあ」

忍の横に移動し、頭をぐしゃぐしゃと撫でる。

忍 「やめろよ」

利尋 「じゃあカレー作るの手伝うか」

忍 「やだ」

利尋 「これでもか」

利尋の手が忍の脇腹をくすぐる。

忍が笑いだす。

利尋 「返事は？」

忍 「わかった。わかったから。手伝う」

利尋、勝ち誇った笑み。

スーパールの袋を持って、キッチンへ行く。

忍、よろよろとしながらついていく。

9. 仁科家・キッチン（夕）

忍、じゃが芋の皮むきをしている。

利尋 「これ」

利尋、忍にさつま芋も渡す。

忍、きよんとする。

利尋 「今日落としちゃったやつ。カレーに入れるから」

忍、気まずそうにさつま芋の皮をむき始める。

利尋、微笑む。

× × ×

鍋いっぱいのカレーが出来上がっている。

忍、眉をひそめて鍋を見ている。

利尋 「ほれ」

利尋が忍に味見させる。

忍、おそろおそろ口に含み、

忍 「うまっ——え、なんで？ 全然違う」

利尋 「だろ。男の本気カレーってやつだ」

忍 「家庭的なカレーってこと？」

利尋 「まあ、そうかな。おふくろ、じゃなくてオヤジの味ってことで」

利尋がカレー皿にご飯を盛り付ける。

その上にとろりとカレーがかける。

忍、皿を受け取り、匂いを嗅ぐ。

忍 「来週もカレーにしない？」

利尋 「カレー屋じゃねえんだぞ」

利尋、忍の鼻を指でつく。

利尋 「ほら、もってけ」

10. 仁科家・リビング（夜）

テーブルの上には大盛りカレーが2皿。さつま芋が
ごろごろ入っている。

利尋 「いただきます」

忍 「いただきます！」

忍、カレーを口に運び、笑顔。

次から次へとかきこんでいく。

利尋はその様子を嬉しそうに見ている。

忍、利尋の視線に気づき、

忍 「食べないの」

利尋 「食べるよ。走ったから腹ペコだし」

忍、にやっと笑って、

忍 「走るの、いつでも付き合うよ」

利尋、面白いと言わんばかりの表情。

利尋 「クソガキが」

忍の頭をぐしゃぐしゃと撫でる。

忍、気にせずカレーを食べ進める。

11. 仁科家・外観（夜）

マンションの外観。

夜の帳が落ち、各部屋に明かりが灯っている。

12. 仁科家・玄関・内（昼）

林田が迎えに来ている。

忍 「先生、早いね」

忍が、利尋の背後でふてくされている。

林田、利尋に目くばせして、

林田 「次はもっと長くても大丈夫そうだね」

利尋 「これから週末が待ち遠しいですよ」

忍が靴を履き、利尋に向き直る。

忍 「またね」

利尋 「おう。いつてらっしゃい」

忍、はっとして、

忍 「い、いつてきます」

利尋と林田、微笑む。

忍、照れくさそうに顔をこする。

おわり